

学位論文要旨

学位論文題目 『うつほ物語』の女性像に関する研究

申請者氏名 黄 睿琦

本稿は、平安時代中期に成立した長編物語『うつほ物語』を対象として、そこに描かれた女性の人物造形を考察するものである。従来の先行論の多くが求婚譚や琴の一族の物語といった構造に関与する一要素として女性登場人物を位置づける傾向にあった。それに対して、本稿では女性の個としての内面や行動を氏族や家族といった集団との対比において捉えていく。そして、女性が帰属集団との関係において葛藤を抱えてゆく様相について検討を加えることになる。

第一章「琴曲に巻き込まれる朱雀帝―「私の后」を端緒に―」では、琴の一族に属する俊蔭女の「私の后」という位置づけを考察した。「内侍のかみ」巻で、俊蔭女の琴の演奏「胡笳の手ども」に感動した朱雀帝が彼女を「私の后」として位置づける場面がある。「私の后」という表現からは、俊蔭女を個人的な偏愛の対象として処遇しようとする朱雀帝の意向が窺える。更に、注目すべきは、この表現が契機となって、帝と後の離別を語る伝承等が引き込まれてくる点である。具体的には、王昭君説話・楊貴妃故事・竹取物語などの引用である。本稿では、これらの伝承が、いずれも「帝が后を手放す」という構造になっており、その構造が『うつほ物語』の文脈にも組み込まれてくることについて論じた。

第二章「「内侍のかみ」巻におけるあて宮の人間化―「高麗」が切り拓く異世界を発端として―」では、「高麗」という表現を手掛かりに、源氏出身のあて宮の人間化を考察した。あて宮の人物造形については、従来、『竹取物語』のかぐや姫に重ねられていると指摘する傾向が見られ、そのため非・人間的な位相に据えられると解されてきた。それを踏まえつつ、本稿では、あて宮の人間化してゆく契機を、「内侍のかみ」巻の言語状況中に見出すことになる。具体的には、「高麗」という表現が切り拓く異国（言説上の異世界）において、あて宮が東宮妃という社会的な身分秩序から解放されること、その際、彼女が一人の女性として仲忠と恋歌を交わし、精神的な恋愛ゲームを楽しむこと、また、その後、あて宮に仲忠に対する恋愛感情が芽生えることで、徐々に夫である東宮に男性としての不満を感じ始め、より人間的な存在として成長していくこと、などについて論じた。

第三章「昔に引きこもる女一の宮―古歌「むかしを今に」の引用による時間の遡行―」では、皇女である女一の宮の「昔」に対する執着と憧憬を考察した。女一の宮は父である朱雀帝の宣旨によって、仲忠に降嫁することとなるが、結婚後の女一の宮の言辞において、「昔」に関する話題が頻出する点に着目した。なかでも、特に「むかしを今に」という『伊勢物語』の古歌の一節が引用される点を問題とした。そして、本稿では、女一の宮が執拗に「昔」の時間を生きる姿勢は、不如意な結婚生活や皇女としての社会的な役割からの逃避と解した。また、この古歌の引用を通して理想化された「昔」が今に復活する可能性を指摘し、結果として、後段の文脈において、女一の宮の憧憬する「昔」が管絃の遊びとして再

現されることについて論じた。

第四章「立坊争いにおける藤原氏の敗北―「盗人」に見られる後の宮の嫉妬心を手掛かりに―」では、「盗人」という表現を端緒に、藤原氏出身の後の宮の嫉妬心を考察した。「国譲」巻に描かれる立坊争いにおいて、後の宮は梨壺腹皇子の立坊に対して消極的な姿勢を示す男君たちに苛立つのみならず、朱雀帝の寵妃である仁寿殿女御に対しても「盗人」と罵倒する。本稿では、この「盗人」という表現の使用に怨念や嫉妬心を読み取った。また、この後の宮の怨念や嫉妬心という「私」的なものが、立坊争いにおける藤原氏の敗北の要因となっていることについても言及した。

第五章『うつほ物語』における擬似的な「はらから」考―女性間の問題を中心に―では、没落氏族出身の宰相の上が俊蔭女と擬似的な「はらから」の関係になっていることについて考察した。「はらから」という表現には血縁関係にある兄弟姉妹という意味が含まれるが、俊蔭女が夫兼雅の妻妾の一人である宰相の上という女性に擬似的な「はらから」の関係を求めようとしていることの意味とは何か。本稿では、この問題に対して、血縁の薄く、母子で流離の苦難を味わった俊蔭女の、女性同士の心の繋がりを求める欲求を見出した。また、俊蔭女と同様に兼雅の妻妾集団に属する女三の宮を比較対象として取り上げ、女三の宮においては「はらから」の関係にある姉妹が互いに敵対関係になっていく過程を考察した。

終章では、各章で取り上げた女性登場人物のありようを確認し、物語の女性像に着目する意義を述べたうえで、個々の女性登場人物が物語の展開や構造において重要な役割を果たしていると論じた。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 175号	氏 名	黄 睿琦
論文題目	『うつほ物語』の女性像に関する研究		
(論文審査概要)			
<p>本論文は、平安時代の長編物語文学である『うつほ物語』を対象として、そこに描かれた女性の人物造形を考察したものである。それぞれの女性登場人物が帰属集団との関係において個としての内面に葛藤を抱えてゆく様相について体系的に論じたものである。</p> <p>本論文の構成は、序章、及び五つの章にわたって展開される本論部分、そしてそれらを総括する終章から成る。また、巻末には、各章の参考文献目録を収める。各章のタイトルは以下の通りである。</p> <p>序章：『うつほ物語』の女性像に関する研究の可能性 第一章：琴曲に巻き込まれる朱雀帝―「私の后」を端緒に― 第二章：「内侍のかみ」巻におけるあて宮の人間化―「高麗」が切り拓く異世界を発端として― 第三章：昔に引きこもる女一の宮―古歌「むかしを今に」の引用による時間の遡行― 第四章：立坊争いにおける藤原氏の敗北―「盗人」に見られる後の宮の嫉妬心を手掛かりに― 第五章：『うつほ物語』における擬似的な「はらから」考―女性間の問題を中心に― 終章：『うつほ物語』の女性像に関する研究の意義と可能性 参考文献一覧</p>			
1. 創造性			
<p>本研究の学術的な特色は、女性登場人物に特化したかたちで論を展開している点に求められる。従来の研究の多くが求婚譚や琴の一族の物語といった構造に参与する一要素として女性登場人物を位置づける傾向にあった。それに対して本論文では、各章につき一人の女性登場人物に焦点を当てながら、それぞれの帰属集団と個の内面の関係を浮き彫りにしていく。この点をもって本論文の創造性は優れていると判断した。</p>			
2. 論理性			
<p>本論文の論証の手続きは、それぞれの女性登場人物にまつわる特定の表現を手掛かりに個人の深層にある私的な側面を読み解くというものである。以下に、各章で論拠とされた表現に触れつつ、その検証過程の概要を示す。</p> <p>第一章「琴曲に巻き込まれる朱雀帝―「私の后」を端緒に―」では、「私の后」という表現を手掛かりに、俊蔭女に対する朱雀帝の個人的な偏愛を読み取る。また、朱雀帝と俊蔭女の会話において王昭君説話・楊貴妃故事・竹取物語などが引用されることで朱雀帝が「后を手放す」物語の構造に組み込まれていくことを論じる。</p> <p>第二章「『内侍のかみ』巻におけるあて宮の人間化―「高麗」が切り拓く異世界を発端として―」では、「高麗」という表現を手掛かりに、あて宮が東宮妃という立場を離れ、擬似的な異国の人と化していく様相について論じる。そして、異人と化したあて宮は、仲忠との会話において恋愛ゲームを楽しみ、制度的な存在から人間的な存在へと変貌を遂げると説く。</p> <p>第三章「昔に引きこもる女一の宮―「むかしを今に」にもたらされた時間の遡行―」では、「むかしを今に」という表現を手掛かりに、女一の宮の「昔」に対する執着と憧憬を考察する。そして、女一の宮が執拗に「昔」の時間を生きる姿勢を、不如意な結婚生活や皇女としての社会的な役割からの逃避と解する。</p> <p>第四章「立坊争いにおける藤原氏の敗北―「盗人」に見られる後の宮の嫉妬心を手掛かりに―」では、「盗人」という表現を手掛かりに後の宮の嫉妬心を考察する。「国譲」巻に描かれる立坊争</p>			

いにおいて後の宮が発した「盗人」という言葉には、嫉妬という私的な感情が込められており、その私的な感情が立坊争いにおける藤原氏の敗北の遠因ともなっていることについて言及する。

第五章『『うつほ物語』の擬似的な「はらから」考—女性間の問題を中心に—』では、宰相の上俊蔭女と擬似的な「はらから」の関係になっていることの意味について考察する。この「はらから」には、孤独な半生を生きた俊蔭女の、心の繋がりを求める欲求が見出されると論じる。

上記の通り、各章では物語の表現を論拠としながら『うつほ物語』の女性登場人物と帰属集団の関係、あるいは個としての内面を具体化し得ており、その論証の手続きも説得力のある成果を挙げていると判断される。よって、本論文の論理性は優れていると判断した。

3. 厳格性

本論文の序章では、論を展開する前提として『うつほ物語』に関する研究史が概観され、構想論から成立過程論、そしてテキスト論へと展開してきた様相と、それを踏まえるかたちで本研究の表現構造に着目する方法の妥当性が説かれている。

各章の冒頭では、個別の問題に関連する最新の先行研究まで丹念に押さえられており、そのような手続きのもとに本研究の立場を画定し、そのうえで論を展開していくという姿勢が貫かれている。以上のような点をもって、本研究の厳格性は優れていると判断した。

4. 発展性

『うつほ物語』の女性登場人物については、本論文で取り上げられた人物の他にも、いぬ宮・実忠妻・袖君・仲頼妻・一条北の方など、個性豊かな女性が登場する。本論文で確立した方法によって、それらの人物たちに伏在している問題も解明される可能性が出てきた。そこに発展性がうかがえる。

以上、審査委員3名の合議により、全体として「優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

⊕・否

審査委員 主 査 (氏名)

森野正弘

(氏名)

柏木寧子

(氏名)

尾崎千佳

(氏名)

(氏名)